

社会学の国際化に関する研究 (4)

世代／ジェンダーから考える

京都大学 伊藤公雄

1 目的

社会学の国際化を、世代、ジェンダーの観点から考える。実感としては団塊世代以上の社会学者の多くは、どちらかというところ国際化に対して積極的ではないように感じている。また、男性よりも女性の方が、国際的な交流には積極的であると考えられる。しかし、実際は、どうなのだろう。世代、ジェンダーの視座から、社会学の国際化について考察を加えたい。

2 方法

2014年7月の世界社会学会議での横浜調査および2016年2~3月に実施した「社会学の国際化に関する調査」(学会員調査)などのデータを軸に、他の諸データなども参照しつつ、考察を加えたい。

3 内容

1980年代末から90年代末にかけて、アメリカの日本研究者と共同研究をしたことがある。「近代日本の伝統の発明」の研究という日米プロジェクトであった(成果はカリフォルニア大出版局から1998年に出版されている)。そこで気がついたことだが、当時50歳代から60歳代のアメリカの著名な日本研究者の多くが、日本語をしゃべるのを嫌がったということだった。古文書を読み、論文や著書を多数発表している人たちが、なぜと思ったものだ。逆に、日本側も、この世代以上の研究者は、欧米の文献を渉猟し、詳細な分析をするのに、会話が弱い人が多い(発表者も含めて)ということも明らかだろう。しかし、現在、40歳代の日本研究者の日本語は、きわめて流暢なのだ。背景には語学教材の発達とともに、世代文化的な要因も控えているのだろうと思う。

ジェンダーについても、たとえば日本人の国連職員の6割は女性(2015年)であり、また、リクルート社の留学希望のアンケートなどでも文系女性の留学希望は、男性と比べてかなり高い。今回の調査データを参照しつつ、海外での学位取得者とジェンダー、さらに海外での就職をしている日本人のジェンダーなどについても考察を加えたい。

4 結論

今後の日本の社会学の国際化戦略にとって、世代およびジェンダーの視座は不可欠である。これをふまえた積極的な国際化の拡充が求められる。